醱　酵

鈴木俊平

講談社

著者略歴　昭和二年生れ
早大仏文卒水戸工高教師
住の友酒造株式会社専務を経て
現在（文学者）編集委員
現住所東京都中野区鷺宮3の109

昭和34年11月30日　第1刷発行　　醱　酵

著者　鈴木俊平

¥ 290　発行者　野間省一

印刷所　豊国印刷株式会社

発行所　東京都文京区音羽町3—19　株式会社講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。　（製本　大進堂）

© Syunpei Suzuki 1959.　PRINTED IN JAPAN

目次

第一部　酒母……五
第二部　攪拌……七〇
第三部　壁がうごく……一二八
第四部　水のおどり……一六八
第五部　冷却……二三七

装帧·永田力

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

醱

酵

第一部　酒　母

第一章　大　旦　那

星島英太郎が仕事を多賀太郎にまかせたのは、戦後の変動に、歩調があわない自分を知ったからであろうか。

清酒の醸造法は、戦後五年目にはほとんど全国的に変ってしまった。日本独特の米だけによる清酒醸造が完全に亡び、三倍増醸と称してアルコール添加を大量に行うようになった。七十七歳の英太郎は、かねがね多賀太郎が提唱していたように、星島酒造店を株式組織の星島酒造会社に改めることを承諾し、自分が「顧問」として隠居することを親戚中につたえた。多賀太郎が代表者で五十二歳、専務が多賀太郎の長男行一郎で最後の旧制大学を卒業したばかりの二十五歳、常務は多賀太郎の妻文子で四十六歳、監査役は文子の実弟光英で姉とは一つ違いの四十五歳。英太郎の命で多賀太郎は、家出同然の光英の印鑑を作って届けをすました。

多賀太郎は、久男という名であったのを、婿養子になるとき、姓名判断の結果、英太郎の懇

請で多賀太郎にさせられていた。
英太郎の一男三女のうち、本来ならば一人息子の光英が酒造業を嗣ぐべきであった。が、当時血気さかんな光英は外国語学校をやって外交官志望であった。ところが昭和初期の左翼運動に巻きこまれて、入獄したり、出所したり、また入獄したりを繰りかえすようになっていた。光英は帰郷したことがない。英太郎は自分の子ではないという顔をしていた。太平洋戦争のさ中にスパイ容疑で光英が検挙された記事が精悍な横顔写真の仲間とともに新聞に載ったときも、まったく他人の子をみる眼で英太郎は、
「ひでえ奴らだ……」
と云いきった。
敗戦直後に、星島光英が一時華やかな脚光を浴びて日本共産党幹部になったころ、英太郎は、
「やつも偉くなったもんだ。生きていれば結構食えるようになってやがる……」
と云った。
それがやがて国際派・主流派の紛争後、間もなく、〈脱党者〉という小説を光英がS社から出版したのが判明すると、英太郎は額に暗い皺を刻んで、
「共産党よりは、小説のほうが儲かるのか……」
文子にむかって呟やいた。
「光英には儲かる儲からないなんてたいした問題じゃないんですよ」
文子がそう云ったとき、英太郎はすかさず険しい眼を光らして応じたのである。

「世間ではすぐそんなふうに云う。が、人間四十にもなって、儲かる儲からねえに無関心なやつなんているもんか。光英だって、金が欲しくなって来やがった。考えてみればそれしかねえ。いまになったら、やつは、酒倉を守ればよかったと思ってるかもしれねえ。姉に婿養子を取られたのを後悔してるかもしれねえ。偉そうなことを云ってるくせに、腹の奥では、自分の酒倉だと思ってる。やつはそんな男だ」

文子は英太郎の光英批判を、そのまま多賀太郎に伝えた。多賀太郎は不愉快な顔で居室のガラス窓から酒倉の一角に立っている赤煉瓦の煙突を仰ぎ、

「そんなこともあるかもしれん。しかし、どうにもならんだろう」

と、心理的な嘔吐を抑えるように云った。

星島酒造店を同族会社の法人組織に改める時、多賀太郎は一応光英に書翰を送って、監査役という名目を借用すると伝えたが、〈脱党者〉から返事はこなかった。英太郎の命令で光英の印鑑を作ることに終始反対だったのは、若い専務になるべき行一郎であった。

「印鑑偽造だなんて、もし万一訴えられたらどうする？　おとなはみんな当てにならないからな」

祖父の英太郎が突然テーブルを叩いた。その眼は異様な執着で燃えている。

「叔父を批判するな！　いくら光英でもそれほどのやくざではない！」

英太郎の骨っぽい手は、皮膚が縮みあがって紙のように乾燥し、小刻みなその震えを止めようとしてテーブルの上に固く組まれた。行一郎はその拳を見つめながら云った。

「お祖父さんは間もなく死んでしまうんだからいいだろうけれど、ぼくらはまだ何十年も生き

なくちゃならないんだ。ぼくは禍根をのこされるのはいやだ！　光英叔父さんとはこの際、手を切っておきたい！」

「何を云うんだ、行一郎！」

父、多賀太郎の鋭い声と視線を正面から浴びた行一郎が、祖父と父とを等分に見較べながら呟やくような声で云ったのである。

「みんなまるで高温醗酵だ。温度を抑えることを知らない醪（もろみ）みたいな感情なんだ。お祖父さんは光英叔父さんを悪く云いながら、根はやっぱり可愛い。お父さんはボイコットしたいくせに自然の感情で遠慮している。そういう感情が発達すると、なんでも許していく寛容さになるんだ。ぼくだってほんとうは叔父さんをないがしろにしたくはない。しかしぼくは、そういう自然の高温醗酵には反対だ。いい酒を造るときは、不自然だって氷を詰めた冷却器を使うじゃないか。これからの生活にたいせつなことは、酒母仕込みのときの懸命な暖気操作と同じ理屈だと思うんだ。あとで後悔するような操作には反対なんだ」

それを黙って聞いていた英太郎が、老人特有の粘っこい冷笑を行一郎に向けた。大学出たての二十代の孫などよりは、五十年以上も変遷多い浮世を生きぬいて来た。肉親とはいえ若僧などに敗けるかといった意地で、白い入れ歯を開いた。痩せた口もとを歪めたのだ。人工の歯だけが精彩を放っていて、英太郎の老醜が冷笑の表面に鮮明な印象をえがいた。

「行一郎。おまえも光英と同じかと、一、二年前まで、わしは、そう思っとった。資本主義がどうのこうのとムキになってやっとった。そのころは弟の行彦に酒倉を任すつもりだったんじゃねえのか。おまえは、叔父の光英なんぞより少しだけ利口なんだ。それが戦後派ちゅうの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

か、転身がす早えだけだ」

「転身？」

祖父によって自尊心をえぐられた行一郎の狼狽した顔がそこにあった。

「ちがうって云うのか。大学だなんてムダ遊びは、いやに生真面目に酒倉なんぞを軽蔑してみたり、あっ、という間に金儲けのほうへ転身させたり、器用な芸を教えるもんだ。考え様じゃ、叔父の光英のほうがまだ筋が通ってらあ。その光英叔父さんと、いまのうちに手を切っておきたいとは何ごとだ！」

英太郎の顔面にこみあげてくるような怒りが漂っている。それがふと若さを帯びた。「――お祖父さんは間もなく死んでしまうんだから、とは何だ！　わしは百までも百五十までも生きてやる。この酒倉はな、明治年間に一代でわしが築きあげたことを忘れるなよ！」

英太郎の昂奮は、喘息の発作をさそった。

「行一郎、お祖父さんにむかって何です？　謝りなさい！」

と文子が英太郎の背中に走りよった。呻くような声でテーブルに上半身を伏せたまま、英太郎は途切れとぎれに云った。

「わしこそおまえたちを信用しておらん。……誰をも信用なんかしてるもんか！　……政府のやり方だっていいかげんなもんだ。戦争中は高粱で酒を造らされた。南京袋がぷんぷん匂う高粱で。いまになったらアルコール添加どころか、三倍増醸だなんて、……清酒造りの邪道じゃねえか！　……わしらが苦労してやって来たものはどこへ行っちまうってんだ。……洋酒だの、合成酒だのへ、どんどん日本酒を近づけていって、酒倉を抹殺しようとしやがる。おまえ

らは、なんでも新しい笛におどればいいと思って、グルタミン酸ソーダがなんパーセントでグルコースの溶解がどうしたこうしたなんて、まるで化学者だ。……そのうえ経営の合理化がどうのこうの……まるで税理士だか経理士だか、毎日々々偉くなって……酒造りはなあ、化学だけれども、酒屋は化学者じゃねえや。税理士でもねえんだぞ。……わしはなあ、倉人と一しょに酒袋へびしょびしょと柿渋つけて、酒倉の屋根に、一枚一枚、何百枚もの酒袋を乾して、次の冬の仕込みを準備してきたんだ。……大正五年に仕込倉の屋根から滑り落ちて左足を折ったが、……そのときだって、若え者らに、ぐずぐずしねえでさっさと乾しちまえ、骨折なんざあ夜でも治せるが、酒袋はお陽さまのあるうちだって怒鳴りつけてやった。……酒倉のおやじなんて偉えもんじゃねえ。……それが外から見れあ、酒倉の大旦那だのへちまだのって……そう云われるようになってから仕方がねえから、外へ出たときは鷹揚な面するだけだ。……おだてられるときは、おだててやがると知っていても、おだてにうまく乗って生きて来た。腹ん中からおだてられていい気になったことなんて、一秒間もあったためしはねえ……。グルタミンだの、取締役だのって、わしはだい嫌えだ。……。が、時代には勝てねえ。いまはただ、一家の者みんなでいい酒倉にして貰いてえだけだ。……光英だって一家のうちの一人じゃねえか。この機会に、名義だけでも片隅に乗っけて置いて貰いてえというわけだ。光英を監査役にしたって、おまえらの酒倉が乗っ取られるわけでもあるめえし……、他人をも肉親をも信用しねえというのは何も新時代だけの頭じゃねえんだぞ。何か仕事をやり遂げる男ってやつはな、誰をも信じてなんかいはしねえが、しかし一人っきりでは事業は出来ねえ。……おまえらにはおまえらの、わしとは違った魂胆もあろう。が、そこが事業だ。……」

英太郎は激しく咳こみまたテーブルに頭を伏せた。それからふたたび頭を起してテーブルを力なく叩いて云った。

「妥協ってものはな、行一郎。信用し合わねえからこそ妥協なんだぞ。酒造りの事業だって、政治家どもの政治だって、信用し合ったらそいつは真の友好ってんだ。……友好なんざ要らねえが、妥協はぜったい必要だ。いつかは酒造りの事業主になるんなら、叔父の光英なんかにビクビクしねえだけの、疑いぶけえ妥協を勉強しておくもんだ……。それが出来ねえなら、この星島の酒倉からサバサバ外へ出てって、自由に暮してくれ！」

「そんなにお祖父さんの云う通り、サバサバ出て行くわけにはまいりませんね」と行一郎が応じた。「酒造りをするためにぼくは星島家の一員に腰を落つけたんだ。就職試験も見送った。勿論ハッキリ云って計算もしました。しかし何よりもぼくが考えたことは、光英叔父さんのように家を出て四十歳も過ぎてから、もし酒倉を嗣げばよかったなどと後悔したらこれほど惨めで不潔なことは無いと思った。弟の行彦にもぼくは云いました。おまえに酒倉をやって貰うつもりでいたが気が変ったって。将来、行彦を恨んだり嫉妬したりするようになったらいやだから……。そしてぼくは、すっ裸で世のなかと戦う自信がないから、自分で酒倉をやる気になった。だからそう簡単に酒倉の外へ行って暮すわけにはいきませんよ」

祖父と孫との応酬の間に、多賀太郎は、二人とも何と無意味な口論をつづけているのかという顔で、途中から立ち上ってしまった。

十一月の末である。毎年その頃になれば、雪国からやって来た酒造りの実際的な技術者でもあり、労働者でもある倉人たちが、酒倉のなかにある広敷（ひろしき）と呼ばれる一室に起居

していた。多賀太郎は玄関をでると革スリッパをつッかけて庭を横ぎり、その広敷のほうへ、自分以外の人間はほんとうにつまらない空理空論をもて遊んでいると、怒ったような姿勢で、どんどん歩いて行った。

英太郎は背中を文子に撫でさせながら、テーブルに伏せている上半身をやや右にねじ曲げ、窓ガラスの外に多賀太郎の後姿を追った。そしてまた、ごほんごほんと咳こみながら、

「あれを黙って見ならえ、行一郎。酒造家はあれでいいんだ。言葉よりは眼と手と舌だ。酒倉のなかでいまなにが行われてるか眼で見て、原料にでも醪にでも酒粕にでも手で触れてみて、思い切って何でも口にほうり込むんだ。頼りになるのは、てめえの舌だ。最後は味覚と嗅覚だ」

「……」

「なんぼうめえ言葉でしゃべったって、政治家じゃあるめえし、酒造家の自慢にはならねえ。お父さんを見ならって、黙って酒倉へ入って行ってみろ。多賀太郎はきっと麹室の殺菌をきちんとやったか、一本一本の倉の柱までホルマリン消毒がしてあるか、知らんふりして見廻ってるんだ。それから精米所へ足を運んで、着荷したばかりの玄米の質を若い衆にきいてらあ。来春に仕込みが終るまで一刻だって神経が休んではいねえ。星島家へ来たばかりのころは、辛くて逃げたかったそうだ……なあ文子、三十年前の若え婿殿の話だ……」

文子は逆らわずに英太郎を抱えるようにして、寝室へ連れて行った。大旦那は室内でも黒い毛革の襟巻をしている。よろよろと立ち上ったはずみに、皺だらけの手で、灰色のサージ仕立てである女中と同じ恰好の前掛を、ぴんと張った。しかしそんな手の動きのわりに、腰から下

はもう弱かった。

第二章　旦　那

光英は名義だけの監査役という役員構成で会社設立はなった。定款もできた。が、英太郎の前では沈黙していた文子も、弟の光英に関しては内心不満を消せないようであった。

文子には、多賀太郎とともに、昭和初期の酒造界の不況時代、過重な造石税に喘ぎながらも、莫大な借金によって酒倉を守ってきたという体験と自負があった。そのころに行一郎は生れた。文子は、東京のC大学で庭球部主将をしていた遠い親戚の某を好きで、ひょっとしたら結婚出来るかもしれないという一度だけの青春の夢を持ったことがある。しかし彼女の夢は、多賀太郎を婿養子として迎えることで妨げられた。行一郎が生まれ、行彦が生まれ、彼女には新しい着物一枚買おうという精神的にも物質的にも余裕のない時代。それでも銘酒『星正宗』の醸造元である星島家の対外的な体面だけは、英太郎・多賀太郎、並びに戦争中に死亡した母の房緒と一しょに保ちつづけた。

その間に、妹の美紗や好子を東京に嫁けている。妹たちは、最近蔭口で、

「お姉さんはお父さんと同じで、敗けず嫌いの吝嗇んぼだから、どんどん財産家になるわよ。遊び嫌いも、あれくらいに徹底できたら偉いものね」

と云っている。文子は弟妹に等分に不満であった。口にこそ表わさないが、それならばあなたたち戦前から戦争中へと、この海岸町の、それほど大きくもない酒倉と運命を共にしてみれ

ばよかったのだ、と胸に抑えた憤りがあった。
事実終戦直後に、四つ下の妹の美紗が悲鳴をあげていたとき、文子は、
「あたしなんかは、戦争前、酒倉にはお米がどっしり積んであるのに、お米を食べるのが惜しくてならない経験をしてるからね」
と皮肉を云った。
「灘や伏見の何万石という酒造家のお姫さまではなくて、関東北端のちっぽけな地酒屋の婿取りのむすめなんですからね。そうぽんぽんと贅沢もできないわ」
とも攻撃したことがあった。
日もなく英太郎は寝室に寝たきりになって専属の家政婦を雇い、毎日医師が訪れた。俗にいう老衰であるが、注射代と引き替えに一日々々を購っていることは殆んど無意味にも見えた。病床で英太郎は、医師と入れ代りに多賀太郎を枕辺によび、酒母の経過等をくわしく尋ねた。品評会用の吟醸には、玄米十石を五割減くらいに精白させて試みたいと多賀太郎が云うと
「そいつはもったいねえ。どうせ吟醸醪だって搾りの前にアルコール添加をしなくちゃならねえなら、せいぜい妥協して四割減の精白なら上々だ」
などと渋い顔をした。「それに、精白度を高めれば高めるほど、つまり材料を吟味すればするほど洗米も浸漬(しんせき)も蒸飯(じょうはん)も、麹から酒母・醪・搾りと、神業みてえな高度の技術が要るんだぞ」
分りきったことだが、英太郎の頭脳は乱れていなかったので、多賀太郎にはすこしうるさかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c